

『悪魔との戦い④』

'23/06/25

聖書箇所:エペソ人への手紙 6章 18-20節(新約 p.381)



ここしばらく…、私たちは「悪魔との戦い」というテーマでもって、みこばを学んできました。…というのも、みこばははっきりと教えてくれているからです！「悪魔とその勢力はたくさん実在していて…、実に様々な策略をもって、私たち人間を惑わし…、この世の悪い流れを作ってしまった…。私たちクリスチャンたちが本当に意識し…、戦うべき相手は、その悪魔と悪霊たちなのだ！」って…。

命題: 悪魔との戦いに勝利するためには？

その悪魔たちのグループに対抗し、その誘惑に勝利するために必要なのは、まずは、①神様の力…、神様の助けでした。それなしに、大した知恵も力も無いような、私たち人間が、狡猾でずる賢い悪魔たちに対抗できる術はありません。それと、ここ2週間で、私たちが学んだものは、②神の与えてくださる武具でした。私たちは、私たち人間の方法や努力などではなく、神様の与えてくださる方法でもって、つまり、神の武具でもって、悪魔たちに対抗していくべきなのです。…そういったことが、ここ3週間で、エペソ 6:10-17のみこばが教えてくれていた内容でした。

今日は、その続きである18-20節の部分を、これから学んでいこうと思いますが、その前に、今回のみこばである、エペソ 6:10-20のみこばを読ませていただきます。そこには、このように記されています。

- 10 終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。
- 11 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。
- 12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。
- 13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。
- 14 では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、
- 15 足には平和の福音の備えをはきなさい。
- 16 これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。
- 17 救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のこばを受け取りなさい。
- 18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽し、また祈りなさい。
- 19 また、私が口を開くとき、語るべきこばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。
- 20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。

Ⅲ・神様に 祈る ! (18-20節)

私たちが悪魔との戦いに勝利するために必要なことの3番目のポイントは、神様に「祈る」！ということです。私を含め、多分、多くのクリスチャンたちが、この「神様に祈る」ということをおろそかにしてしまっているのではないのでしょうか？…しかし、感謝なことに、このみこばは、私たちに、「本当の祈りとは、どのようなものであるか？」ということについて教えてくれています…。

●祈りとは、願いを神に伝えるための方法ではない！

まず、この18節をご覧くださいますと、『すべての祈りと願いを用いて…』と書かれています…。皆さん、分かってくださいますか？⇒このみこばは、「祈り」というものと…、そして、「願い」とが区別されているのです(ピリピ4:6も、その他多数)！実のところ、多くのクリスチャンたちが誤解しているかも知れないと思うのですが…、祈りとは、私たちの願いを神様に申し上げるための方法・手段ではないのです…。

例えば、皆さん…。結構前、「山上の説教」で学んだ「主の祈り」というものを覚えてくださっていますか？そのみこばをご覧くださいますか？マタイ 6:9-13に、こうあります。『9 だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。11 私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。12 私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人々を赦しました。13 私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』』[「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。】…この箇所は、イエス様が、その当時、パリサイ人や律法学者たちが間違った祈りを教えていたような時代にあって…、所謂、「祈りの模範」というようなものを示してくださいました…。

ここをご覧くださいますと、初めは、『天にいます私たちの父よ…』という呼びかけで始まっています。勿論、祈りとは神様との会話であり、相手があるものですから…、こういった呼びかけがあって然るべきなのですが、注目したいのは、その後です。非常に短くてシンプルなものですが、ここで、イエス様は、初めの前半部分の祈りの言葉を、神様をあがめるために使っておられます…。

1コリント 10:31で、パウロは、『こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。』と教えてくれているように、多分、皆さんは自分のなすべきすべてのことをもって、神様の栄光を現わすべきであるということと、頭ではご存知だと思います。…だったら、私たちは、その祈りを通して…、まず何よりも、神様をあがめるべきではないでしょうか？

それに、詩篇や聖書に出てくる祈りなどをご覧くださいますと…、その目的は、私たちの願い事を神様に知っていただくためのものではありません。…と言いますのも、「主の祈り」を覚えてくださったイエス様だって、その直前の、マタイ 6:8で、『だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。』と教えてくださったじゃないですか！神様は、私たちの願い事も…、それ以上に、本当は、何が必要で、何が不必要かということもすべて御存知なのです…。

もしも、私たちクリスチャンが、こういったことをよく分からない…、あるいは、勘違いしたままにしておきますと…、私たちは必ず失望していきます…。何故なら、私たちの持つ、すべての願いが叶うことなんて、「絶対」と言って良いほど有り得ないからです…。そうじゃありません？

そして、もう1つ…、もしも、私たちが神様に願いだけを捧げてしまっているのなら…、私たちが気付かないといけないのは、「私たちは神ではない！」ということです。…と言いますのは、「私たちのために」、神様が存在しておられるのではなく…、「神様のために」、私たちは造られ…、今、生かされているのだ、ということ私たちがしっかりと覚えられないといけないのではないのでしょうか？

だから、イエス様の覚えてくださった「主の祈り」でも、そういったことが強調されているのではないのでしょうか？神様に呼びかけた後、『御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。…』とあるのは、「真の神様こそが主権者である」という告白そのものです。違うでしょうか？

これまた、以前に、「主の祈り」を通して学んだことですが、後半の願いとなる部分に関しても、私たちがこう祈るから、神様が願いを聞いてくださって…、必要を与えてくださるというのではなく…、神様こそが主権者で、私たちの必要をすべて御存知で、神様は必ず私たちに顧みてくださる…、というある種の信仰告白でもあるのです…。私たちは、祈りという方法でもって、①神様をあがめ…、②私たちの神様を世に証しし…、③神様への信仰を告白しているのです…。

●私たちが祈る時に、気をつけるべきことは？

そうして、今日のみことばの 18 節をもう一度ご覧ください。『どんなときにも…』とあります。しかし、実際、私たちは、いつ、どんなタイミングの時に、神様に祈るべきなのでしょう？また、具体的に、どういったことを注意すべきなのでしょう？明らかに不可能なのは…、ここ 18 節で、『どんなときにも…』とあるからと言って、私たちが物理的に、24時間…、しかも、そういったことを毎日毎日、続けていくことは不可能であるということです…。

実は、私たちは時々、こういったケースに遭遇することがあります。…ある教会の牧師や中心的なメンバーたちが、急激に教会のメンバーが増えたような…、別の教会を視察しに行くのです。ここ最近では知りませんが、一時期は、ここ日本でも「韓国の教会ツアー」というようなものが流行した時がありました。そうして、こんなことを学んで帰ってこられるのです。「あそこの教会は、朝6時から早天祈禱会をしていましたよ！」とか…、「礼拝中、別の部屋で、教会のメンバーが何人も、その礼拝が祝福されるようにお祈りしていましたよ！」あるいはまた、「教会のメンバーが代わる代わる交代し…、1日24時間…、あるいは、1週間、連続して祈禱を続けていましたよ！私たちの教会も…」というわけです…。

いかがでしょうか？まるで、自分たちが、そのような祈りを捧げさえすれば、教会のメンバーが増やされると言わんばかりです…。正直言って、朝早い祈禱会が間違っているとか…、礼拝中に、別の部屋で祈禱会を持つとか…、連鎖祈禱などが間違っているとは言いません。いえ、むしろ、それらは喜ばしいことかも知れません。しかし…、私たちが勘違いしてはならないのは、そういったことをやりさえすれば…、神様は、私たちの教会を祝してくださる…、人数を増やしてくださる…、ということではないということなのです。

そういったような早天祈禱会を持つから…、朝早くから教会が心合わせて祈るから、神様は、その教会を祝してくださるのではありません…。実際、先程見たみことばには、『すべての祈りと願いを用いて…』とあって、「朝早いものでなければならぬ」とか…、「大勢で祈らなければならぬ」とか…、「続けて祈らなければならぬ」というようなこととは…、むしろ、正反対のことが教えられているように思われます。いえ、むしろ、このみことばでは、『すべての祈り…』とありますように、大事なことは、私たちがどんな心で祈るか？ということでは必ずです。何故なら、神様は、私たちの祈る言葉や時間よりも、その心を御覧になっておられるからです…。

教会に来て、この場所で祈らなければ答えられないのでしょうか？⇒いえ、そんなこともないはずですよ。だって、教会とは、本来、場所や建物ではなく、イエス様を信じて救われた者たちの集まりであるからです。あるいはまた、目を閉じて手を組んで祈らなければダメなのでしょう？⇒いいえ、そのようなことを聖書は教えていません…。目を開いていても…、何かをしていて手が離せないときでも…、心の中で神様に祈る時、当然、神様はそれを聞いてくださいます。他の人と一緒に祈っても…、自分一人で祈っても…、あるいは、黙って心の中で祈っていても…、仕事中でも…、道で歩きながらでも…、あらゆる祈りを神様は聞いてくださいます…。だから、今日のみことばで、『どんなときにも(祈りなさい…)』とか、『絶えず目をさまして(祈りなさい…)』とあるのです。

聖書を観察してみますと…、イエス様だけでなく、多くのクリスチャンたちは、朝・昼・晩と一日3回祈らなければいけないとか、限られた回数を祈らなければいけない、というようなことを教えてはしません…。いえ、それどころか、私たちクリスチャンは、いつでも…、どこでも…、神様の前に立つことができるのです。しかし、かつて、旧約の時代は、そうではありませんでした…。その時代時代には、大祭司が1人だけいて…、神様を象徴する至聖所に入ることができたのは、1年の内、たった1度だけでした…。しかも、その日、大祭司は、いけにえの血をたずさえて…、かなり面倒な手順を踏まないとはいけませんでした…。間違いなく、その時の大祭司は、死ぬほどの緊張を経験しながら、至聖所に入っていったのです…。

しかし、驚くべきことに、神様は、今の時代、私たちクリスチャンに特別な恵みを与えてくださって、私たちはいつでも神様に近づくことができます。皆さんも、よくご存知でしょう…。イエス様が十字架に磔になられて、私たちの罪の贖いをなしとげてくださった時、一体、何が起こりましたか？⇒マタイ 27:50-51にはこうあります。『50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。51 すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。』…ここで言われている『神殿の幕』とは、当時、神殿の一番奥にあった至聖所と聖所とを分けていた幕のことです。それが、『上から下まで真っ二つに裂けた…』というのは、「神様が裂いてくださった」ということです。…この時以降、私たちクリスチャンには、いつでも、神様に近づくことができるという素晴らしい特権が与えられたのです。それは、イエス様が、神様と人間との仲介者となってくださって、私たちの罪すべてをイエス様が、完全に贖ってくださったからです！…このイエス様の贖いのゆえ、私たちは、いつでも、どこでも、神様に祈ることができるのです。

ただ、間違いなく、聖書のみことばは…、もしも、私たちの心に不義(=罪)があるならば、神様はその祈りを聞いてくださらないと教えてくれています…。例えば、詩篇 66:18 です、『もしも私の心に不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。』…また、それ以外でも、例えば、ヤコブ 4:3 には、こうあります。『願っても受けられないのは、自分の快楽のために使おうとして、悪い動機で願うからです。』…また、ヤコブ 5:16 には、『ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働く、大きな力があります。』とある通りです…。ですから、もしも、私たちが今日のみことばを実践しようとするなら、私たちは常に、神様に思いをはせ…、自分自身を罪から聖く保つ必要があるのです…。

●『御霊によって…』⇒私たちが祈るべき態度とは？

次に、みことばは、『御霊によって祈りなさい。』と教えます。ここで、みことばは、どんなことでも、あなたの好きなこと…、また、欲しいものすべてを神様に願い求めなさい！とは教えません。「御霊に導かれて…、祈りなさい！」と教えるのです。

例えば、パウロは、ローマ 8:26-27 で、こう教えてくれています。『26 御霊も同じようにして、弱い私たちが助けをくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いたいような深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。27 人間の心を探り窮(きわ)める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。』…私たちの内におられる聖霊なる神様は、私たちに祈るべき言葉…、また、歩むべき道を教えてくれます。御霊なる神様は、いつも、救われた私たちと共に居てくださって、私たちの経験するすべてを、私たちと一緒に経験し…、私たちが助け導いてくれるのです…。

ここ 27 節で、『人間の心を探り窮める方』とあるのは、(天の)父なる神様のことです…。聖書が教える神様とは、三位一体なる神様です。ですから、『御霊の思い』と、真の神様の思いとは完全に一致するのです…。神様は、神様御自身の栄光のために、私たちに造り…、実に、そのために、私たちに罪(とその裁き)から救い出してくださいました…。御霊は、この目的のために、私たちに導いてくれるのです。

例えば、私たちは病気になった時、「この病気を癒してください！」と祈ります…。しかし、ひよっとすると、病気になることが神様の御計画で、その病が癒されないことが、神の栄光に繋がることなのかも知れません…。神様は、御自身の目的に従って、すべてのことをなされるのです…。しかし、私たちが用いられて、神様のみこころがなされ…。神様の栄光が現わされるのは、私たちの願いでもあるはず…。私たちの内におられる御霊は、そのように、私たちを導き…。助けてくれるのです…。それは、ちょうど、イエス様が、あのゲツセマネの園で祈られた祈りと似ています。あの時だって、イエス様は、本当は、あんな忌まわしい十字架になんか、かかりたくなかったはずなのに、こう祈ってくださったでしょ？…『父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。』(ルカ 22:42)、『わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。』(マタイ 26:42)って…。

良いでしょうか、皆さん？『御霊によって祈(る)』というのは、「御霊に満たされること」でもあります。ですから、神様の思いが、その人自身の思いと重なり…。神様の願いがその人自身の願いにもなって…。その人は神様の栄光が現わされる…。最善のものを求めて祈るのです。例え、その祈りの答えが「ノー」であっても、です…。何故なら、それこそが神様のみこころであり…。神様の最善がなされたのですから…。

『御霊によって…』私たちが祈る時、私たちは決して、自分勝手な…。独りよがりな祈りを捧げたりはしません。だから、今日のみことばの 18 節には、『すべての聖徒のために…』とあるのです。何故なら、悪魔の軍勢と戦っているのは、私たちだけではないからです…。確かに、以前、私は、この 12 節から、私たちの戦いとは、個人的な戦いであるとお話ししました。しかし、だからこそ…。そこに、周りのクリスチャンたちの祈りや支えが必要なのです…。

それとまた、ここ 18 節には、『忍耐の限りを尽し、また祈りなさい。』と命じられています。「決して、失望するな！」ということです。しかし、実際問題として…。私たちが失望せずに、祈り続けていくというのは、時として、大変なことですよ…。

でも、感謝なことに、教会のある方たちは、「私には祈ることしかできないから…」と謙遜して、おっしゃってくださいます。しかし、それは本当に感謝なことなのです。…と言いますのは、教会の中には、先程見たような「信仰の賜物…。熱心に祈り続けてくださる賜物」というようなものがあるからです。そういったことこそが大事なことなのです…。ここで、パウロは、そういったことを、私たちに対して、切に願っているのです…。

●パウロの切なる 願い !

今日のみことばの 19-20 節に、パウロの祈禱課題が挙げられています。『19 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。』…あのパウロほどの人物でも、「どうか、私のために祈ってください！」と願っているのです！パウロは、人に祈ってもらうことを恥とはしませんでした。自分自身の弱さを知っていたからです。「自分には、祈りが…。神の助けが必要である！」ということ、よく知っていたのです！

そのパウロの願いは、「福音を大胆に語れるように！」ということでした。何と、パウロは、この時、その福音を宣べ伝えたことによって投獄されていたのに、「もっと、私がこの福音のメッセージを宣べ伝えられるように祈ってください！」と願っているのです。…と言うのも、パウロは、この福音こそが…。いや、この福音のメッセージだけが、すべての人たちを罪(とその裁き)から救ってくれる、唯一の方法である！ということをよく分かっていましたから…。

このエペソ書が書かれたのと、ほぼ同時期に書かれた、ピリピ 1:17-21 には、こう記されています。『17 他人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。18 すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでみます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。20 それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。』

この当時、ある者たちは、パウロに対する党派心…。つまり、パウロを苦しめるために伝道した、と書かれています。しかし、それであっても、パウロは喜んだのです。何故なら、それによって、福音が広まっていたからです…。救われる魂が起こされていったからです…。

あのパウロにとって、究極の願いとは、人々が地獄から救われることでした…。また、イエス様の素晴らしさが現わされることであつたのです…。20 節で、パウロは自分のことを、「福音のための大使」とであると称しています。ここで使われてある、『大使(となる)』(πρεσβεύω)というギリシヤ語の言葉は、「遣わされた者、あるいは、一国の代表者…」というような意味を持っています。この時のパウロは、自分が神様から遣わされた使者…。つまり、神のメッセンジャーであることをよく分かっていました。パウロは、自分という人間が、神様から選ばれて…。天国を代表して、その天国への切符である、福音を伝え…。救いを宣べ伝えているという自覚がありました…。だからこそ、パウロは、自分が釈放されることよりも、福音が広まっていくことを…。自分が大胆に福音を伝えていくことができるように、ということをお願いしたので…。

<励ましの言葉>

皆さん、私たちはどうでしょう？…皆さんのご家族や親しい友人…。あるいは、職場の同僚やクラスメイト…。ご近所の方…。そういった方に、私たちは大胆に福音を語っているでしょうか？パウロは、福音のために投獄され…。『鎖につながれていても…』、自分が大胆に語っていいことを願いました。今現在、私たちの体は、鎖に繋がれていたり…。自由が制限されていたりしませんよね？

この私たちが福音を語らないで、一体、誰が、救いを宣べ伝えることができます？『大使』として…。神のメッセンジャーとして選ばれたのは、パウロだけではありません！ここにおられるクリスチャンの皆さん、全員が福音を携えた大使であり…。神のメッセンジャーなのです！

感謝なことに、当教会では、4年ぶりに、「ジョイフル・キッズ」のプログラムやファミリーキャンプを行なうことができそうです！今回、そのジョイフル・キッズのためのチラシも、たくさん刷ってあります。どうか、私たちが、たった一つの救いの道を宣べ伝えることができる…。神の大使として、また、神のメッセンジャーとしての務めを果たすことができるように、祈ってください。そして、どうぞ、そのことを覚えて…。神様の前に正しく歩んでいってください。悪魔の誘惑や策略に屈することなく…。神様からの力を得て…。神の武具を手にして、祈りをもって、毎日を神に喜ばれるよう、自分に与えられた務めを忘れることなく生きていってください…。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。